

沖縄における郷友会の形成過程と今日的展開

A Formation Process and Contemporary Development of Okinawan *Kyoyukai*

山城千秋

1. 社会教育における郷友会研究

本研究は、沖縄の集落（シマ社会）を中心に、その共同性およびその変化をとらえること、そして集落を離れた人々による故郷への郷土意識と帰属意識との関連性を検討することなどを主目的として行っている一連の研究の一部をなすものである。その一連の研究の目的を達成するために、本研究では、「シマンチュ」としての主体形成の要素である、集落の自治活動と共同性の社会教育的な意義を明らかにするとともに、共同体としての機能が次第に弱まっていくなかで、遠隔地から共同体を支える郷友会の存在理由とその共同性構築の意味について考察する。

今日の合理化と効率化の浸透は、生活環境と生活様式に人を介さなくても生きていくことを可能にしつつある。このため、現代社会を覆う都市化の進行と生活のコンビニ化、サービスへの委託化という人を介さない間接的行為は、地域の共同性を必要としなくなり、他者との相互行為による人間形成を疎外する結果をもたらしている。このような課題解決に対し、地方分権がすすむ今日では、人間形成を育む地域の共同性の回復が重視され、教育、労働、家族、価値観の根本からの見直しが求められている。

その意味で沖縄は、集落を基盤とした自治活動と社会教育活動とが一体となり、地縁・血縁を軸としながら地域の共同性を維持・発展してきた歴史があり、前述の課題を考察する上で貴重な歴史的経験を豊かに持っている。その集落公民館を中心にした年中行事や自治的活動は、社会的存在としての人間の生存や生活を支えている相互依存的な共同関係を契機にしているといえる。そのような関係は、たとえ故郷を離れて都市に移動したとしても、故郷での人間関係を断つことはなく、故郷の人々と一体だと考えられている。沖縄集落の特質は、その基礎をなしている地域性と共同性に求められ、その特質を解明するきわめて重要なものが、郷友会である。

その郷友会とは「原則的に、故郷を同じくする者と

その家族が、旧来の地縁・血縁を構成原理として、成員相互の親睦・扶助等を基本的な目的とする集団」⁽¹⁾のことであり、現在では主に奄美と沖縄に特徴的な組織とされている。構成の基盤となるのは、移動する前の集落における共通の生活体験である。また郷友会は、行政指導によって上からつくられたものではなく、集落を離れて都市に住みついた同郷の者たちが自主的につくったものである。

そのような郷友会も過渡的段階を迎えていると言われている。一世とは違い、故郷での生活体験をもたない二・三世が増え、郷友会の消滅は早晚避けられないと考えられてきた。しかし、結成から約40年以上経た今日においても郷友会は、その役割を変遷させながらも、都市に故郷を再生し創造している。そこで、本研究では過渡期と言われながらも、維持可能としている郷友会の今日的展開を、沖縄島と石垣島で活動する郷友会を事例に、集落との関わりから明らかにしていく。

「沖縄は郷友会社会である」と言われる。郷友会は、それぞれの諸事情で故郷を離れ、那覇や県外の都市に移り住んだ人々で構成されている。本土における都市移住と比較して対照的なのは、彼らに移り住んだ都市にあっても、故郷の人間関係や伝統的な生活習慣を同郷結合組織である郷友会によって再生産してきたことである。そして、組織形成の契機となる要因は、故郷における生活文化体験を共通にしていることである。彼らは、運動会や敬老会、生年祝いなどの定期行事の他に、模合による相互扶助や会報の発行、故郷への寄付行為に、行事への帰省、さらには郷友会墓の建設など、個々人異なる都市生活を基盤にしながらも、都市へソフト・ランディングさせるために、慣れ親しんだ故郷の共同性を再現しているのである。したがって「沖縄は郷友会社会である」とは、故郷である共同体の存在を前提にしていることも意味している。

このような内実をもつ郷友会に着目する理由は、教育学研究における人間関係の構築と地域の共同性に関して、新しい視点を与えることになるからである。戦後の都市化と過疎化は、地域から人がいなくなること

を意味し、相互行為によって形成される地域への愛着や定住意識は限りなく薄くなり、他者認識を欠いた自己意識は、確立することなく浮遊する人々を確実に増やしてきた。もはや物質的豊かさだけでは、人間の成長発達を保障することはできないことは明白である。

では、人間形成という視点から郷友会をみたとき、このような急速な都市化と過疎化はどのように映るのか。結論を先取りして言うと、故郷を基盤にした人間関係は、見知らぬ群衆の都市に対しては、お互いの仲間意識や連帯感、つながり意識を強め、故郷に対しては、村にいたときと変わらない共同体の一員としての一体感が認められるのである。こうした郷友会と故郷(地域)の共同性は、都市化と過疎化による人間関係の断絶を当然視してきた言説に対し、都市と農村を結ぶ一つの関係構築のあり方を示すものである。つまり都市が地方からの移住による人口増大の結果として論じられることはあっても、「出身地」と現住地の都市がどのように個人人の自己意識と属性に影響を与えているかについての研究は意外に乏しく、ここに郷友会の社会教育的機能に着目する理由がある。

2. 戦後郷友会の形成過程と都市生活

(1) 「故郷」概念の形成

故郷というのはあらかじめ存在しているのではなく、移動したことによって発見されるものとしてある。し

たがって故郷の成立は、移動が行われることによって始まるのである。沖縄における郷友会の形成も、農村・離島から那覇や中部への移動に伴い、これまで自分がいた集落を振り返ることによって、故郷が発見された。

その故郷概念が成立していくときに、次の三つの事柄が特に強調される。一つは歴史という過去の時間を共有していることであり、二つめは同じ風景・空間をもつという感覚であり、三つめに言葉を同じくするという意識であり、その地域の言葉で感情を表すという主張である²⁾。つまり、歴史と風景と言語を同じくするということを故郷の重要な概念とし、それを共有することにより、同じ故郷をもつということが確認されていくのである。そのような故郷概念を共有するためには、故郷における共同性と生活文化の体験が前提にある。

沖縄県内各地は、集落毎に祭祀が多いことが特徴であり、それぞれの集落で独自の祭り・行事をもっている。祭りや行事に限らず、集落の生活文化のなかには、異世代との相互交流を喚起する共同の教育が内包されている。たとえば沖縄文化の大きな要素を占める民俗芸能の継承は、共同でいかに関わり合えるかに依存している。同様に、文化を継承する後代が成長できるかは、先代が周縁的参加の間口をいかに広げるかに依存している。日常的生活文化の諸事象には、そうした共同による相互作用が内包されているのである。こうした集落を離れる以前の生活文化体験は、同じ時間を

表1 那覇市およびその周辺地域と石垣市の人口推移

| | 那覇市 | 沖縄市 | 浦添市 | 宜野湾市 | 石垣市 |
|-------------|---------|---------|---------|--------|--------|
| 大正9年(1920) | 100,112 | 25,742 | 11,707 | 12,704 | 18,930 |
| 大正14年(1925) | 98,305 | 24,451 | 11,374 | 12,569 | 20,858 |
| 昭和5年(1930) | 105,331 | 25,050 | 11,264 | 12,857 | 20,510 |
| 昭和10年(1935) | 111,329 | 25,134 | 11,369 | 13,346 | 20,749 |
| 昭和15年(1940) | 109,909 | 23,861 | 11,084 | 12,825 | 20,837 |
| 昭和25年(1950) | 108,662 | 34,551 | 11,910 | 15,930 | 20,920 |
| 昭和30年(1955) | 171,682 | 53,273 | 18,832 | 24,328 | 33,131 |
| 昭和35年(1960) | 223,047 | 66,658 | 24,512 | 29,501 | 38,481 |
| 昭和40年(1965) | 257,177 | 77,708 | 30,821 | 34,573 | 41,315 |
| 昭和45年(1970) | 276,394 | 82,781 | 41,768 | 39,390 | 36,554 |
| 昭和50年(1975) | 295,006 | 91,347 | 59,289 | 53,835 | 34,657 |
| 昭和55年(1980) | 295,778 | 94,851 | 70,282 | 62,549 | 38,819 |
| 昭和60年(1985) | 303,674 | 101,210 | 81,611 | 69,206 | 41,177 |
| 平成2年(1990) | 304,836 | 105,845 | 89,994 | 75,905 | 41,245 |
| 平成7年(1995) | 301,890 | 115,336 | 96,002 | 82,862 | 41,777 |
| 平成12年(2000) | 301,032 | 119,686 | 102,734 | 86,744 | 43,302 |
| 平成17年(2005) | 312,393 | 126,400 | 106,049 | 89,769 | 45,183 |

注1. 国勢調査各年次より作成。

2. 那覇市は、旧首里市・旧小禄村(1954年合併)、旧真和志市(1957年合併)の人口を合計した数字。

3. 沖縄市は、旧美里村(1974年合併)の人口を合計した数字。

4. 石垣市は、旧大浜町(1964年合併)の人口を合計した数字。

過ごし、同じ空間を見、同じ言葉で話し、同じ感情をもつ基本的な人間関係を構築し、それらが共通認識となつて、故郷概念を形成する要素となつていく。故郷は、都市空間のなかで発見され、郷友会もまた故郷概念を形成していくうえで大きな役割を果たしてきたのである。

(2) 戦後における郷友会の形成過程

郷友会の結成自体は、戦前の「大宜味一心会」にまで遡ることができるが、組織性を備えた郷友会のほとんどは、終戦後から1960年代頃に結成されている。その背景には、離島を含め農村部から那覇や米軍基地周辺の中部への大量の人口移動がある。また、集落を米軍基地に接収された人々が移転先で郷友会をつくる事例もある。

戦禍によって焦土と化した沖縄島中南部は、1950年代から米軍基地の建設が本格化し、それに応じて労働力の需要が急速に高まった。また那覇においても復興建設が進み、経済活動も軌道に乗るようになり、また1950年には、米軍政府により沖縄初の高等教育機関である琉球大学が設置された。そのような経済的・教育的背景のなかで、沖縄各地の農村からは、生活の糧を求めて大量の人々が那覇やその周辺、基地の街へと流入しはじめた。前頁の表1に示すように、1950年頃から1965年頃までの数十年間に、那覇市をはじめその近郊の浦添市、米軍基地を抱える沖縄市や宜野湾市において、著しい人口流入が起こったことが確認できる。

このような農村から都市への人口移動は、戦前、本土への出稼ぎや海外移民を経験した人々でないかぎり、ほとんどの人々にとっては、著しい心理的葛藤を伴うものであったと考えられる。戦前の沖縄社会は、前出の表1のように都市においても人口移動は小さく、そのことから、人々はシマと呼ばれる自分の生まれた集落で、一つの完結した世界のなかで生きており、他の集落の人々と深く接触することはほとんどなかった。

つまり、これまで同じ言語、風俗、習慣などを共有してきた「同質社会」から、緊張・葛藤が伴う「異質社会」での生活を余儀なくされた。そのため、出稼ぎのため農村から都市へ出る場合、多くの人々が単独で見知らぬ地へやってくるのではなく、同郷の者、血縁の者を頼って出てくるのが圧倒的であったし、互いに消息を交わしつつ助け合って生活していたのである。

1950年代の米軍基地建設による産業構造と社会の変化は、都市地域への人口集中をもたらし、その結果として多くの郷友会の結成をみるにいたっている。それは、故郷での人間関係を新しく住み始めた都市で再生産させて生活していることを意味している。

その郷友会の地域別にみた結成時期については、表2に示すように、1950年頃から1970年頃にかけての約20年間に集中しており、全体の70%以上がこの時期に結成されている。この時期が沖縄の郷友会結成のもっとも重要な時期であると考えられる。また、地域別にみても、まず北部出身者による郷友会は、1950年から1960年にかけて多く結成されているのに対し、その他の南部、離島、先島地域では1950年代後半から1970年頃までに集中していることがわかる。このことから、郷友会の結成時期は、それぞれの出身地から労働力が大量に流出し、那覇や近接地域、基地の街の人口が急増する時期とほぼ一致しているといえる。

こうして故郷を後に那覇へ出てきた人々は、居住地を構える場合にも、相互扶助の関係が作用している。それは、先に移動した親族や同郷者を頼りに出て行くのであり、そのため那覇には、各集落出身者による居住地が形成されることになる。たとえば、国頭村奥郷友会の会員は、繁多川、識名あたりに多く居住し、今婦仁村出身者は真和志、大宜味村の大宜味や大兼久出身者は安里周辺に集住していることなどがある。それは、偶然の結果ではなく、親族は親族、シマンチュはシマンチュを呼び寄せるという地縁・血縁の機能が作用していると考えられる。

表2 時期別・地域別にみた郷友会の結成年次

| | 北 部 | 中 部 | 南 部 | 離 島 | 宮 古 | 八重山 | 計 |
|----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1945年以前 | 5 | | 1 | | 1 | | 7 |
| 1945-50年 | 9 | | | 2 | 1 | 1 | 13 |
| 1951-55年 | 29 | | 1 | 1 | 4 | | 35 |
| 1956-60年 | 14 | | 1 | 9 | 10 | 6 | 40 |
| 1961-65年 | 9 | | | 5 | 16 | 3 | 33 |
| 1966-70年 | 2 | 1 | 1 | 10 | 7 | 7 | 28 |
| 1971-75年 | 1 | | | 8 | 7 | 2 | 18 |
| 1976-80年 | | | 1 | 11 | 4 | | 16 |
| 1981-85年 | | | | 1 | | | 1 |
| 計 | 69 | 1 | 5 | 47 | 50 | 19 | 191 |

石原昌家『郷友会社会』19-20頁、琉球新報社編『郷友会』から作成。

また、職業構成についてもある程度出身地によって特徴がみられた。たとえば、固有名詞として通っている「大宜味大工」のような建設土木は、国頭、大宜味、警察官は宮古、八重山、久米島など、同郷者による職業の斡旋や紹介などが行われ、故郷を出てきた若者たちにとって、郷友会は都市にソフト・ランディングするためのインフォーマルな機能を備えていた。しかし、1950年代から60年代頃にみられた住居紹介や職業斡旋は、その後の核家族化による世帯の分離や居住地の分散化、産業構造の変化、情報化の進展、公共機関による職業斡旋などによって、郷友会の役割から消えていった。

郷友会は、集落単位に組織されているが、その上位組織として、町村の連合組織があり、行政組織との関係でみると、郷友会は字（区）であり、連合組織は市町村自治体もしくは学区（宮古）に対応しているといえる。たとえば、奥出身者は、那覇奥郷友会の会員であると同時に、北斗会という国頭村の連合組織の会員にもなる。さらにそれが県外・海外の場合、沖縄県人会がその上位組織として位置づけられている。したがって、集落単位の郷友会では、シマンチュとしての共同意識をもち、市町村人会では町村人として、そして県人会では沖縄県人として発言し行動することになる。しかし、帰属意識の根幹となるのは、集落であり、その上で他者との関係で選択できる自己を多くもつことが、郷友会研究を介しても理解されうる。

3. 「戦後沖縄の郷友会と地域の共同性に関する調査」の分析

このような結成時期や結合要因も多岐にわたる郷友会活動を知る手がかりの一つに、琉球新報社が1979年5月12日から翌年5月20日まで193回にわたって連載した189の郷友会の記録、『郷友会』（1980）がある。沖縄の郷友会に関する個々の調査研究はみられるものの、全体を網羅するようなアンケート調査、統計的な分析は『郷友会』以外にみあたらないといつてよい。そこで本研究では、郷友会活動が活発であった1980年と今日の郷友会を比較するために、同書に基づいて追跡調査を行った。ここで分析対象とした郷友会は、連載された189会のうち、沖縄県以外の8会と、市町村人会を除いた148会に、掲載されていないものの、同じ町村に属する119の集落を加えた300件を抽出して、故郷となる集落公民館宛に郵送による質問紙調査を行った。その結果、回収率は28.7%（86通回収）となっている。なお地域別の回収率は、北部35.7%、中南部50.0%、本島離島13.2%、宮古11.1%、八重山49.1%となっており、宮古郡からの回答が特に

低い結果となった⁽³⁾。

(1) 郷友会の目的および活動内容

1980年代には、沖縄島内で400以上の郷友会が確認されている⁽⁴⁾。その後の郷友会活動については、世代交代や故郷での生活体験の希薄化、若者の郷友会離れなどの理由により、その存続が危惧されてきた。今回の調査結果によると、郷友会が「ある」と答えた集落は、57.0%の49集落・71郷友会であり、「昔からない」33.7%、「昔はあったが現在はない」9.3%となっている。

その同郷者によって組織された郷友会の目的とは何か。故郷からの流入者が増えるにつれ、郷友会も1960年代頃から組織として整備されていく。その典型が規約・会則の制定である。今回の調査でも、67.6%の郷友会が会則をもつと回答している。それによると、北部地区の名護市源河の郷友会の場合は、まず第1条で「この会は、那覇源河郷友会と称し那覇市及び近隣市町村に在住する源河出身者をもって組織し、事務所を那覇におく」とされ、会員の資格は、同郷出身であることが前提となっている。その上で、「この会は、会員相互の親睦を図り郷里源河の発展に寄与することを目的とする」（第2条）と定め、その目的達成のための事業として①会員の相互扶助に関する事項、②郷里源河との連携（第3条）が行われている。

また、沖縄竹富郷友会を例にすると、組織は「本会は沖縄在住の八重山郡竹富町字竹富島で出生したものと及びこれらの配偶者並にその子孫をもって組織する」（第2条）とし、その目的は「本会は西塘大主に肖り全会員の強固な団結により会員の親睦、社会的地位の向上をはかり文化社会の建設に寄与せんことを目的とする」（第3条）となっている。そのために、①会員の親睦に関すること、②会員の文化教養に関すること、③その他本会の目的を達成するに必要な事業（第4条）を行うこととしている。このように郷友会は、内的機能として、都市に故郷の人間関係を再生させる親睦や相互扶助を行い、外的機能として、故郷に

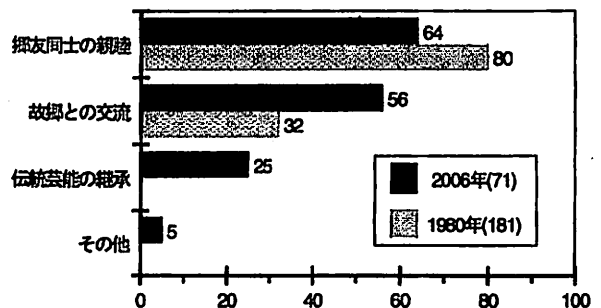


図1 郷友会の目的

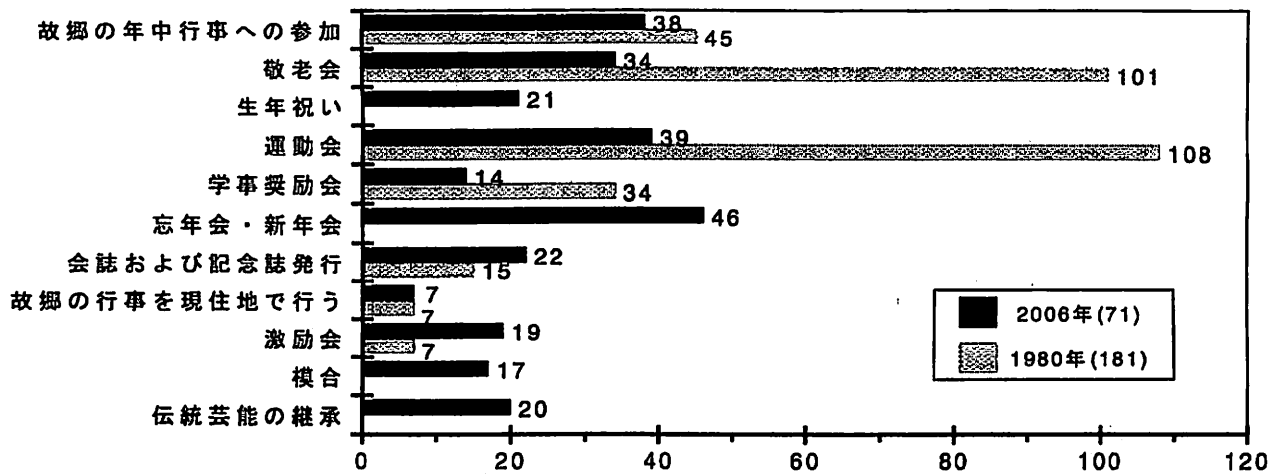


図2 郷友会活動の内容

に対する積極的な支援，社会的貢献を行うことを共通にしているといえる。

それでは郷友会の目的を、『郷友会』が発刊された1980年代と今回とを比較してみる。図1に示すように、1980年代は都市に暮らす「郷友同士の親睦」にまずは主眼がおかれ、次いで「故郷との交流」が重視されていた。それが今日では親睦もさることながら、故郷との交流に主眼が移りつつあることがわかる。また、伝統芸能の継承については、八重山や多良間の郷友会からの回答が高かった。会則や1980年代と比較しても、郷友会の目的は、結成当時から①会員の親睦、②故郷との交流の二本柱であるが、その当時の社会状況、生活状況に応じてその比重を変えてきたと考えられる。

次に、その活動内容について比較したものを図2に示した。回答母数に差があるため、単純に比較することは難しいが、1980年代に約半数以上の郷友会が取り組んでいた「敬老会」と「運動会」は、今日まで郷友会活動において重視されている行事である。その運動会は、郷友会単独というよりも、市町村人会レベルで行うことが多く、たとえば国頭村の北斗会では、同村の20集落郷友会の対抗による大運動会を毎年開催している。その運動会は、会員相互の親睦を目的にしているが、郷友会の将来を見据えた人材育成を目指しているともいえる。今日では、故郷の生活文化体験をもたない二・三世の子どもたちに対して、郷友会行事を介して交流の場をつくり、一世の伝統を伝えようとしているのである。

「故郷の年中行事への参加」は、北部・中南部の場合は豊年祭や海神祭、アブシバレー、区民運動会などの集落行事への参加が多い。一方、八重山でも、豊年祭をはじめ結願祭、節祭といった、集落の重要な祭祀行事に帰省し、さらには「伝統芸能の継承」の母体としての役割を果たしている郷友会が多く、それぞれの

節目の集落行事では、故郷の住民と一体となって参加することになる。このように沖縄のシマ社会は、故郷を出た者と、残った者を峻別する意識が少なく、両者の一体感が集落行事を介して強く保たれていると考えてよい。また過疎が進む集落にとっても、郷友会との相互扶助の関係は不可欠であり、たとえば「2カ年に一度は海神祭とともに豊年踊りがあり伝統芸能の保存につとめているので、郷友会の協力なくしては行事ができない状態にある」（大宜味村字根路銘）ように、故郷から出て行った者も、集落の一員として捉え、その伝統文化を共同で継承することによって、郷友会も故郷とのつながりを保つことができるのである。同時に、運動会の機能と同じく、二・三世の子どもたちが故郷の伝統文化を知る貴重な機会でもあり、その担い手となる人材育成の場であるともいえる。

さらに、「会誌および記念誌発行」の事業は、現住地が異なる会員にとっては、重要な連絡網・故郷の近況を知る情報源となっており、会誌を発行できるかどうかはその組織の力量を占める指標にもなっているといえる。ほとんどの会誌には、会員名簿が掲載されており、なかには県外・海外の名簿や、故郷の住所録まで掲載されているものもある。

(2) 郷友会の衰退とその要因の克服

くり返しになるが、郷友会は、出身地の地縁結合を形成の契機としている。しかし、その結合要因である出身地は、郷友一世の故郷であり、郷友二・三世にとっては、故郷にはならない。故郷での原体験を持たない世代が増えるなかで、この間なくなってしまった郷友会もある。今回の調査で「昔はあったが、現在は無い」と答えた8集落のうち、次のようになってきた理由が示された。「会長の高齢化、若者の非協力によるもの」（那覇近郊大浜郷友会、2005年に解散。今帰

仁村字大浜)、「リーダーとしてなり手がいない、理由等は分からない」(在那覇なぎさ会、解散年不明。名護市字汀間)、「役員のみなり手がいない」(在沖大北郷友会、2003年に解散。久米島町字大原)、「高齢化と予算不足のため」(在沖仲原郷友会、1990年に解散。宮古島市字仲原)、「親村との関係が薄くなった」(石垣在川平郷友会、平成の初め頃に解散。石垣市字川平)などがあげられた。

郷友会衰退の内在的要因として、郷友会員の高齢化と後継者不足が指摘されるが、一方で外在的要因では、特に交通網の整備・発展によって、故郷が遠くでなくなったことも考えられる。沖縄の道路体系は、祖国復帰以降、海洋博覧会を契機に高速道路などを含め格段と整備され、また自家用車の保有率も高くなった。車による交通は、往来の自由度と生活圏の広域化をもたらした。沖縄全域が物理的にひとつの日常的な生活圏になったといえる。また、航路の整備も、離島の宮古や八重山出身者の帰省を容易にし、出稼ぎを終えてUターンして事業をおこす人々を増やした。

一般的に、交通網の発展は地域共同体からの人々の流出を加速させると言われているが、沖縄の場合、むしろ親戚づきあいや行事参加を目的に、共同体を強化する方向で機能しているように思われる。そのため、これまで郷友会が果たしていた「疑似共同体」としての役割の一つは、個々人が故郷に頻繁に帰ることができることによって、消滅していったと考えられる。

1980年代、郷友会活動が盛況であった時代に、同じく郷友会研究も隆盛を極め多くの蓄積を残したが、衰退論を最後に、近年ではその研究動向さえうかがい知ることができず、郷友会の社会的役割の解明は、90年代以降みるべきものがない。会員に対する活動や事業を行う内的機能は、都市生活への同化を進めながら、一方では故郷に対する主体性と帰属意識を育んできた。そして、外的機能である故郷との相互扶助関係は、特に過疎化と高齢化に苦しむ人々の精神的支えとなり、地域づくりに対しても、支援を惜しまない関係を構築してきた。郷友会の今日的役割は、郷友会自体の高齢化も問題であるけれども、それ以上に過疎化で高齢化した故郷の喪失を食い止めるための一翼を担うことであるといえるのではないか。

4. 故郷と郷友会の今日的展開

郷友会の実態をさらに検討するために、個別の聞き取り調査から具体像を明らかにしたい。今回の質問紙調査で対象とした集落は、過疎と呼ばれる地域である。2007年9月現在、県内には18市町村が過疎地域市町

村となっている⁶⁾。そのなかで、本研究では国頭郡国頭村字奥と、八重山郡竹富町字西表祖納の集落と郷友会の関係を見ていくことにする。いずれの集落も、沖縄最北端と、離島のなかの離島である西表島西部という僻地にあり、また過疎と高齢化の地域課題を抱える古層の村であり、郷友会と密接な関係をもって、その課題克服に応えようとしている集落である。

(1) 国頭村奥郷友会⁶⁾

字奥は、沖縄最北端の字で、山間地のために戦前から那覇や与論島に山原船が往来した。1906年(明治39)に沖縄ではじめての共同店が創立され、集落の繁栄の基となっている。その共同店の駐在所が那覇につくられ、戦前から8世帯ほどが那覇に移住していた。

終戦とともに、集落は米軍の焼き討ちにあったものの、製材所をはじめ製茶工場、共同店、おく丸の建造などの復興を「共同一致」、「共計在和」の精神で成し遂げ、また県内でいち早く発電所を設置し、集落独自による電気事業を行った集落となった。しかし、引き揚げ者による人口増加や、高等教育への進学のために、次第に那覇近郊への出稼ぎ者、若者が逐年増加していった。

1949年には、戦前の移住者を含めて約30数名が那覇に在住するようになり、従来の奥人会を組織的に運営し、相互の連携を密にすることを目的に、1951年7月に在那覇奥郷友会を発足させた。結成当時はわずか50余名、15世帯だったが、1996年には約1,300人、318世帯を組織している。

郷友会の運営は、年一度の総会にて決定される。会長は任期一年制で、役員も含め選挙で選出する。会には、成人会、婦人会がおかれ、年一世帯当たり5,000円の会費で事業運営が行われる。連絡事項は、現住地を21班に分け、その班長を中心に行っている。このような組織形態は、他の郷友会にも共通し、それが集落の自治組織と同じであることから、郷友会が「疑似共同体」と呼ばれる理由である。

奥で培われた「共計在和」の精神は、故郷を離れてもなお堅持されており、次頁の表3に示すように、奥郷友会の様々な活動に反映されている。郷友会が那覇市真地に共同墓地を建設したのは1954年のことである。当時は、帰省するのに2泊3日もかかり、不安定な雇用下での生活状況では経費も負担となっていたため、会員が使用可能な郷友会墓を建設したのである。その共同墓は、郷友会が管理し、年間使用料を郷友会に納める。そして共同墓をつくったことを契機に、奥集落では行われていない清明祭を恒例行事に加えることになった。1981年になると、各自で墓をもつようになり、共同墓の管理は、郷友会から墓地管理組合に移

表3 奥郷友会略年表

| 年 | 事 項 |
|------|---|
| 1949 | 8世帯の転居者と出稼者約30名が那覇に在住を受け、4月に奥人会を発足させる。 |
| 1951 | 4月に郷友会設立準備委員会を設置。 7月、奥人会を発展的に解消、在那覇郷友会を結成。初代会長に設立準備委員長の故宮城親也氏が就任。世帯数15、会員数50名。同時に奥郷友会会則を定める。 |
| 1954 | 10月、墓組合を結成して真地に80坪の墓地を購入。 |
| 1957 | 特別基本金制度の発足。 |
| 1960 | 1月、郷友会を発展させるための礎として成人会が発足。 |
| 1961 | 2月、在那覇奥老人睦会の結成。 議事録を始め、特別会計簿等諸帳簿を整備する。 |
| 1962 | 6月、婦人中年会の結成。 郷友会の役員を従来の推薦から無記名投票に変更。 |
| 1963 | 青年会の結成。 |
| 1964 | 9月、基本金に関する規約の施行に基づき、特別会計を設置して、一人\$50までの貸付を行う。 10月、会員の不慮の事故や継続的な輸血を必要とする難治病に備えて、会員の血液型検査を実施。 |
| 1966 | 1月、28年間母校の教育に尽力された金城キヨ先生の還暦祝い。 5月、那覇血液銀行の協力を得てアブシバレー行事を機会に血液型名簿を整備。 9月、郷友会歌の制定。 11月、『奥郷友会々誌』の発刊。 |
| 1968 | 奥小学校創立60周年記念に対し、郷友会会員の寄付\$2,200余を小学校へ贈る。 母校の教職員の便宜を考え、教員宿舎を部落に寄贈。 |
| 1969 | 5月、奥小学校創立60周年を記念して、歴代校長の顔写真を作成し、学校へ寄贈。 5月、成人会のOBによる中年会結成。対象は46～65歳。 5月、「奥郷友会新聞」第1号を発刊。 9月、郷友会20周年祝賀行事を開催。『在那覇郷友会』（第2版）発刊。 |
| 1970 | 奥小学校創立60周年記念式典に、郷友会から約400人が出席。 中年会の結成。 |
| 1972 | 成人会会則の一部改正により、成人会の年齢が49歳に引き上げられ、中年会は、50～65歳となった。 |
| 1973 | 『奥郷友会会員名簿』（第3版）発刊。 |
| 1978 | 奥小中学校70周年記念体育館建設のための募金活動を始める。 11月、『奥郷友会会誌』（第4版）発行。 |
| 1983 | 『奥のあゆみ』編集委員会の発足。 |
| 1985 | 『郷友会誌』（第5版）発刊。 |
| 1986 | 字誌『奥のあゆみ』発刊。 奥共同店創立80周年祝賀会。 成人会の卒業年齢を55歳から60歳に引き上げる。 |
| 1990 | 5月、「鯉のぼり祭り」へ鯉のぼり110尾を寄付。 10月、第1回奥区民大運動会を開催し、区民・郷友会員が運動会を楽しんだ。3年に1度開催。 11月、奥小学校80周年記念式典開催。図書館の充実のために寄付を行う。 |
| 1991 | 成人会の卒業年齢を60歳から65歳に引き上げる。 9月、在那覇奥郷友会創立40周年記念式典ならびに祝賀会の開催。 12月、『奥郷友会会誌』（第6版）の発行。 |
| 1993 | 7月、第2回奥区民運動会に、郷友会からも多数の会員が参加。 |
| 1995 | 10月、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年記念式典および奥共同店89周年記念行事。 |
| 1996 | 5月、第3回奥区民運動会開催。運動会後は、アブシバレーを開催。 10月、奥共同店創立90周年記念祝賀会を開催。 11月、奥区共有連名地に関する懇談会を那覇で開催。 11月、10年ぶりに成人会の卒業式を行う。 12月、『奥郷友会会誌』（第7版）の発行。 |

出典：『奥郷友会会誌』各号から作成。

管することとなった。共同墓地の建設に果たした郷友会の役割は、社会変化とともに変遷させてきたといえる。

さらに、1957年には郷友会では初めてともいえる特別基金制度を創設している。これは、奥集落からの寄付や会員からの寄付約5万B円を基金にしたもので、医療費や学費の捻出に困っている会員に無利子で貸し付け、互助事業として活用されてきた⁷⁾。今日においても貸付金は一人20万円を上限として、会員の相互扶助、福利厚生に役割を果たしている。

また、会員の不慮の事故や継続的な輸血を必要とする場合に備えて、1964年に会員の血液型検査を行い、それをもとに名簿を作成した。郷友会誌は、1966年に発刊して以来、これまでに第7版まで発行している。初版と第2版(1969年)の会誌は、主に那覇に移動した人々の連絡網としての役割を果たしたが、第4版(1978年)になると、故郷・奥在住者名簿をはじめ、中頭地区、名護地区、八重山地区、大阪地区、関東地区、九州地区、南米在住者の名簿が掲載されるようになった。しかも、屋号もすべて調査し記載していることも特徴的である。さらに、郷友会では、会誌とは別に、会員の電話帳を作成し、いつでも連絡が取り合えるようにするなど、郷友会の活動を日常的にしてきた。

会誌は、長年故郷を離れて各地で活躍する郷友の消息を確かめ、共同意識をつなぐ役割を果たしてきた。これも時代の変化とともに、会員の居住地が那覇以外にも広がり、転居が増えるにつれ、その名簿の整理・作成には多くの時間と労力、そして強固なネットワークを必要とする。このような会誌を発刊し続けられる背景には、郷友会が分村的存在として、故郷と表裏一体をなしている関係があるからと考えられる。つまり奥で生まれ育った人間は、どこに移り住もうと、奥の共同性に内包されているのである。

奥郷友会の特徴について、会員の発言によれば、①現住地が近く、近所づきあいができることが郷友会の結束につながっている、②同業者が多く会員それぞれの職業に格差がない、③郷友会に年中行事がある、④会長が一期ごとに代わる、ことをあげている⁸⁾。

2007年10月、創立100周年を迎えた奥共同店の記念式典には、人口223人の集落に郷友を含む約600人が集い、「先人への感謝・共同一致・元気で輝く村づくり」を再認識し、共同の心を確認し合った。

(2) 竹富町西表・祖納の郷友会⁹⁾

故郷が与那国に次いで遠い西表島の西部に、祖納・干立集落がある。古来から、西表西部の政治、経済、交通の中心地であり、同島で最も古い伝統をもち500年以上の歴史がある。戦後は、石垣島、沖縄島への出

稼ぎ者が増え、まず石垣市に1953年に石垣在西表郷友会が結成し、1958年には在沖西表郷友会が結成されている。西表とは、両集落合わせての呼称であり、実際にはそれぞれ公民館をもち、個別の自治組織によって運営されているが、青年会については、両集落の青年によって構成されているが、祭事になると、青年はそれぞれの公民館の青年部に所属する。祖納の人口は、2006年5月現在で174人、84世帯、干立は101人、58世帯となっている。西表島全体としては、県外からの移住者で人口の増加傾向にあるが、両集落では子育てをする若い世代の減少で少子化が進み、過疎化の一途をたどっている。中学校を卒業後、島を離れ、高校や大学へと進学した後、故郷に帰ってきて、若者の働く場が少ないことも課題となっている。

祖納・干立両集落は、共同の西表郷友会¹⁰⁾を石垣市と那覇市にもっているが、集落単位の郷友会も存在している。祖納では「まるま会」、干立では「干立トゥバイラマ会」といい、石垣市にその拠点がある。ここでは主に、祖納集落と密接な関係をもつまるま会について、見ていくことにする。

まるま会(約100世帯)は、1975年に石垣で設立されたが、前述したように、それまで祖納出身者の多くは、西表郷友会で活動をしていた。比較的人口規模の大きかった祖納が郷友会の中心となっていたために、干立出身者は1965年頃に独自のトゥバイラマ会を結成した(舟浮はカマドマ会という)。そのため、会員は二重の郷友会に参加していることになる。しかし、故郷との関係になると、西表郷友会ではなく、それぞれの会の会員として、帰省する。

まるま会には、青年部も組織されている。青年部は二世が中心となっているが、なかには西表で小・中学校まで生活した体験をもつ者もいる。人数は、10～20名程度で、年齢は18～40歳となっているが、ここでも若者の参加が少ないことが課題となっている。青年部では、祖納青年会との交流も行っており、青年会が11月に開催する青年芸能発表会には、まるま会からも芸能を出し、居住地を越えて青年相互の親睦を深めている。

まるま会の行事は、祖納集落と結びついていることが特徴である。集落行事の5月のこどもの日大運動会、7月の豊年祭、そして11月の節祭への参加協力である。会員の親睦を目的としたものは、4月の祖納公民館新役員との懇親会、母の日のレクリエーション、青年部の浜下りキャンプなどを行っているが、石垣にいる際は、やはり西表郷友会としての活動がメインとなっているようである¹¹⁾。そのため、まるま会では、故郷との共同性を重視した行事を展開しているといえる。

そのなかでも、まるま会の目的は、集落の伝統行事

と民俗芸能の継承にあるといえる。祖納集落にとって最大の祭事は、豊年祭と、国の重要無形民俗文化財にも指定されている節祭であり、祭事の運営には郷友会の協力が不可欠となっている。豊年祭では、五穀豊穡を祈願して綱引きが行われるが、前日から多くの郷友が帰省し、その準備作業に加わる。早朝から綱編みが住民総出で行われ、夕刻には盛大に綱を引き合うのである。また、節祭では、郷友会から旗頭が出され、狂言や棒術、芸能、船漕ぎ競争の神事に青年部が集落の青年たちと共同で演じる。船漕ぎ競争の練習は、約1か月前から石垣の港で行い、祭り当日、島の青年たちと本番に望むのである。

まるま会の会員は、祭事のたびに家族親戚を連れて帰省し、集落の人たちと変わらない役割を担い、集落の繁栄を願い続けてきた。このような集落との密接な関係が、子どもたちのシマに対する郷土意識を形成していると考えられる。祖納に暮らす青年も、石垣に暮らす青年にも共通していることは、小さい頃からの祭事への参加が、集落への誇りを生み、それがUターンを望む青年の自己を形成しているということである。島の子どもたちは、中学校を卒業すると島を離れていく。しかし、その間に、集落の人々、祭りと深く交わることによって、故郷を内面化していく。たとえ故郷に帰れなくても、自己の存在証明としての郷友会が各地にある。集落のもつ文化の担い手形成という教育的機能が、各地に郷友会を結成させているといえるのではないか。まるま会会長の古見用全氏は、「地元の祭りがあるから郷友会がある。豊年祭と節祭がなくなれば、地元に戻らないだろう」と述べ、また公民館総務の石垣金星氏は「自分たちの生まれ育った古里があることが、郷友会存立の理由。古里と郷友会をつなぐのが祭事」と述べているように、集落の伝統行事がもつ、文化の担い手形成としての教育的機能が、多くの潜在的Uターン者を生み、それが郷友会に結びついていくと考えられる。

5. 郷友会の今日的意義と課題

西表島西部、約360年もの歴史をもつ網取集落は、風土病と闘いながら、稲作で生計を立てていた集落である。1970年には7世帯が住んでいたが、就学児童がいなくなったことで学校が廃校となり、翌年7月に36人の村人は移住を決め、廃村となった。網取を離れた人々は、移住先の石垣で同様に廃村となった崎山、鹿川三集落出身者による「うるち会」という郷友会を結成し、今日に至るまで年に一度の里帰りを続けている。故郷は喪失しても、故郷の共同性が郷友会

を再生させたのである。このような事例は、米軍基地の中に集落を消滅させられた人々による郷友会にも共通している。

しかし、郷友会の本来の姿とは、故郷における文化の担い手形成という教育的機能の具現化にある。つまり、故郷で培われた人間関係や文化の共有という集落の教育的機能の延長線上に郷友会は存在するのである。故郷すなわち集落は「見える共同体」として存在し、その共同体の内実を伴いながら形成されるのが「見えない共同体」である郷友会であることから、表裏一体として存在している。したがって故郷を喪失した郷友会は、その再生を共同性に変えて維持可能としているが、郷友会の本来の役割である故郷の教育的機能の継承は、故郷の衰退と関わって等閑視できない問題提起であるとしてとらえている。

過疎であっても、文化的な生活を享受する権利は、誰にでも平等に保障されなければならない。その文化的な生活は、他者から与えられるものではなく、住民自らが継承し創造していくものであるために、それが後継者不足などによって困難となって喪失する事例は、日本全国各地で起こっている。しかし、沖縄では郷友会の存在が、そのような社会的困難を文化的紐帯によって克服することを可能としてきた。集落の人口流出が激しく、ほとんどの者が高齢者ばかりの集落も多くなり、伝統的な祭祀行事さえ在村者だけでは維持できなくなっているところでは、那覇にいる郷友会が以前にもまして大勢で郷里の祭事に帰り、積極的に参加して故郷を支える傾向も強まっている。

今回の質問紙調査では、集落の人々に郷友会に関する自由記述を行った。その回答が次頁の表4である。ここで指摘されることは、様々な問題はあるにせよ、集落の多くが郷友会の存続を望んでいることである。結成当時の郷友会の役割は、故郷の人間の絆や文化、生活習慣を基本に、都市生活への安定的定着を果たす会員相互の対内的役割を果たしてきた。それはまだ故郷が健在であった時代だからこそ、必要とされた役割であった。今日、過疎に苦しんでいる集落の内発的發展には、これまで明らかにしてきたように、郷友会の対外的役割が新たな課題として提起されている。それは、故郷と表裏一体であることを背景に形成されてきた郷友会の今日的意義であり、また求められる役割として認識されはじめている。

故郷での生活文化体験をもたない二・三世の増加は、郷友会の後継者として期待されながらも、彼等もまた出生した現住地を親世代とは異なる故郷として創造してきた。しかし、故郷意識は一つである必要はない。ブラジルに移民した多くの沖縄人の子孫は、今や三・四世の時代になっている。ブラジル人として同化して

表4 母村と郷友会に関する自由記述一覧

| No. | 市町村名 | 自由記述 |
|-----|------|--|
| 1 | 国頭村 | 郷友会の会員の高齢化に伴いここ4～5年会員数が減少しつつある。 |
| 2 | 大宜味村 | 年輩が少なく、若い子が郷友会の認識が薄くなっている、年々催し物に人が少なくなり、ただの観光客がまつり等に見ている。 |
| 3 | | 一番の問題は、若い方の参加が少ないこと、役員の手配が少なくなること、昭和30～50年代まで盛んだった郷友会活動も世代の若返りで郷里を知らない方々が多くなり、また、それぞれの地域活動に参加しても郷里への協力、強調は薄らいできている。昭和20年代後の方々の時代に入り、郷友会の存続さえむつかしくなっています。私もリタイアして区長をしており郷友会長もしたが、何とか郷里への思いを深めたく、ここ2～3年は字の費用で3月3日の浜下りを利用して郷友会をまねき、若い方に郷里を理解してもらえよう努めております。 |
| 4 | | 郷友会会員も都市地区で生まれ育った世代になり、会への関心が薄く役員の手が容易ではなく、役員選出に苦勞している現状であり、今後の母字への行事の参加がどうなるかと危惧される。 |
| 5 | | 高齢化により年々参加者が少なくなっている。 |
| 6 | | 郷友会会員の1世が年をとり、2世の参加が少ない。今後の活動に不安である。 |
| 7 | 今帰仁村 | 15～20年前前までは郷友会の人員も多数でしたが、年々減少している。字との交流も疎遠になりつつある、特に二世三世の世代。 |
| 8 | | 字によって違いはあるが、当字郷友会の場合は活動が休止状態にあり、運動会等への協力参加でこちらから多数参加するが、郷友会側の参加が少なく、今後の協力態勢に疑問をもっている。 |
| 9 | | 諸会合において、参加者が年々減っていく状態。 |
| 10 | | 結論から言って期待できません。衰退である。理由は時代の流れだろうと容易に推測できる。現在三世代である。生まれ育ったところは母村ではない。ものの見方、考え方、価値観もかわっている。郷友会としては母村との関係を運動会、新年会と関係を維持しつつ発展させようと一生懸命ではあるが、郷友会のほうでは盛り上げられない。またその逆の現象もある。全体的にみて、義理で付き合い合っているようで毎年減少傾向にある。母村への愛着が薄れつつある。したがって将来期待できないのではないかと思います。 |
| 11 | | 当字では郷友会と字の活動はやっておりません。今帰仁郷友会の運動会、忘年会等に参加する。今後郷友会との活動をしたいと思えます。 |
| 12 | 本部町 | 少子高齢化で年々協友会活動も衰退気味である。 |
| 13 | 宜野座村 | 郷友会・世会員は郷土愛が強いが、二世三世になると郷土への思いが薄れていき、郷友会の存続がむつかしい。 |
| 14 | 伊江村 | 母村の立場：現在当村の郷友会の団体といたしましては2団体(北部地区、南部地区)が活動しています。互いに年間をとおして諸行事(敬老会、運動会、激励会)に参加し、交流の場として続けています。伊江村は離島ということもあり、中学を卒業すると島外に出て学ぶのですが、郷友会のみなさんとかかわりを持つことで親元をはなれての生活の不安がとれ、絆も深まりこれからも続くことを願っています。 |
| 15 | | ①高校進学から本島に渡りますので、それらの激励会を今後郷友会で供していただきたい。②本島在住者で郷友会への未加入者がいるのでその加入促進をはかるべき。③今後とも交流を活発にしていきたい。 |
| 16 | | 若者の会員数を増やすよう努力につとめ、村の行事や活動に積極的に参加すると同時に母村へのUターン増大につながることを期待します。 |
| 17 | | わが部落においては、本当の部落出身者が少なくなり、古くからある部落行事に対してはどうしても那覇にいる部落出身者をお願いをし、大きな行事をおこなうことがあります。 |
| 18 | うるま市 | 古里を思う気持ちは万人皆共通と思う。当地もそういう先人たちのおかげで物心両面の助けを頂いて今日がある。これから先も人が人である以上続くとと思う。互いに感謝し力を出し合えば、理想郷がつけると信ずる。 |
| 19 | 渡名喜村 | 敬老会等の行事において交流している状況である。今後は情報を提供しながら取り組んでいきたい。 |
| 20 | 宮古島市 | 郷友会組織も二世三世の時代に入り活動が年々むつかしくなっている。 |
| 21 | | 昔から伝統芸能があるかぎり、これからも村おこし行事として多くの住民が老若男女ともに続けてほしい。 |

| No. | 市町村名 | 自由記述 |
|-----|------|--|
| 22 | 宮古島市 | これまでは陸上競技大会（部落別）中心の活動でしたが、これからは老人や子どもたちにもできるスポーツ、レクリエーション（グランドゴルフ）等 |
| 23 | | 郷友会員の高齢化によって活動が鈍りつつある。 |
| 24 | 多良間村 | 郷土愛に満ちた意義ある活動を期待いたします。 |
| 25 | 石垣市 | 沖縄本島にみやとり郷友会がありますが、沖縄本島で「宇石垣」主催の諸行事等は積極的に参加し応援してくれる。ふるさとにはありがたいと思うことが多い。今後継続してほしいと思っている。 |
| 26 | | 大川字会だけの郷友会はないけれど、4カ字（石垣、大川、新川、登野城）の郷友会は沖縄本島や本上（関東、関西）等にあります。 |
| 27 | | 宮良公民館には公民館窓章が昭和59年にでき、その心が各郷友会にも根つき母村との強いつながりとなっています。 |
| 28 | | 母村の行事への参加や郷友会への母村公民館執行部の交流は多いが、子、孫世代の交流がなくなりつつあり、血縁関係が希薄になりがち。 |
| 29 | | 一世の方々には方言を知ってまして、古里への思いはやはり大きなものだと思う。しかし、私は二世でして、方言は7～8割程度しか知りません。三世となるとほとんど知りません。それで集会等で伝統芸能や母島との交流を若い人たちに感じさせていかないと郷友会の存続が厳しいのではと思っています。私の意見ですが、郷友会活動は一世の方々、郷想心を慰めているようにも思います。本心より郷友会を永続させたいと思っています。 |
| 30 | 竹富町 | 島も高齢化の進展（現在35%）と共に、各種諸行事、産業（さとうきび）の維持が困難となりつつあります。これまで以上に郷友会との協力を強めていきたいと思っています。 |
| 31 | | 郷友会の協力がないと年中行事もできない状態なので、交流を深め、伝統芸能の継承に努めなければならない。 |
| 32 | | 大宮地区は昭和27年に開拓し、開村した。今年54年を迎える。50周年の節目には盛大な記念祭を催した。このような大きな節目には協力体制をお願いし、郷友会の皆様多くが参加した。通常の記念祭（毎年開催される）には特につながりはない。 |
| 33 | | 他地区からの移動してきた人々が増え、今後とも郷友会の結成はない。集落の郷友会はないが、西表島としての活動がある。 |
| 34 | | 郷友会員の親睦を深めるとともに、親村の発展、活性化と伝統文化と継承につとめる。 |
| 35 | | 古里があって郷友会が存在するように、元気な古里を創り互いに協力し合っている関係です。古里は遠きにありて想う、そして古里は近くにありて創る島人 |
| 36 | 与那国町 | 郷里を離れた郷友が、各郷友会独自の行事として敬老会、生年祝い、運動会、学事奨励会、伝統芸能継承、記念誌発行等の活動をしている。在沖縄与那国郷友会は、子どもたちに郷里の思い出をという目的で夏休みに2～3日の日程で与那国ツアーを組んでキャンプを行っている。地域活性化の一つの方法として郷友の力を借り、与那国応援団を結成していきたい。 |

いく人ももちろんいるが、そのなかで沖縄の歌・三線や民俗芸能を介して自らの先祖のルーツを誇りに思い、「日系人」としてではなく、「県系人」として生きる若者も多い。同様な主体形成のあり方は、アメリカンやエスニック・グループなどにも見ることができる。

集落ならびに郷友会の今後を考えると、後継者育成の課題はもはや避けて通ることのできない新たな状況におかれている。その課題を克服するための一つの方策として、集落単位の郷友会が今日でも盛んな八重山の事例に依拠すれば、「古里があって郷友会が存在するように、元気な古里を創り互いに協力し合っている関係」（表4、No 35）を再構築し、そして故郷と郷友会をつなぐ集落行事、民俗芸能のもつ文化の担い手形成という教育的機能の再評価が必要なのではないか。何が個人を「シマンチュ」として規定しているのか、

そして青年期の課題である自立と主体性の確立において、集落はどのような意味をもつのか、こうした研究を郷友会との関連のなかで実証的にも理論的にも深めなければならない。

現代のように、県境・国境を越えた労働力移動が活発化した時代においては、多くの人々が移動して異なった文化の地域社会で生きていくことになる。こうした場合、沖縄に限らず同郷ネットワークのもつ意味は大きいと思われる。したがって今後、本研究では触れることのできなかつた日本本土における郷友会、市町村人会、県人会についても、青年期の課題と関連づけながら、県外・海外におけるその活動と比較する形で研究を深めていきたい。

注

- (1) 玉城隆雄・稲福みき子「沖縄における郷友会と地域社会に関する研究(1) —方法論を中心に」沖縄国際大学教養部紀要第16巻第17号, 1991年, 84頁。
- (2) 故郷概念の検討については, 成田龍一, 藤井淑禎, 安井真奈美, 内田隆三, 岩田重則『故郷の喪失と再生』青弓社(2000年)に詳しい。
- (3) 質問紙の地区別送付先は, 次の通りである。なお()は, 回収数を示している。北部112(40), 中南部6(3), 離島53(7), 宮古72(8), 八重山57(28)。
- (4) 石原昌家『郷友会社会』ひるぎ社, 1986年。
- (5) 総務省自治行政局過疎対策室によると, 沖縄県の過疎地域市町村は次の通りである。宮古島市(市町村合併による), 【国頭郡】国頭村, 大宜味村, 東村, 本部町, 伊江村, 【島尻郡】渡嘉敷村, 座間味村, 粟国村, 渡名喜村, 南大東村, 北大東村, 伊平屋村, 伊是名村, 久米島町, 【宮古郡】多良間村, 【八重山郡】竹富町, 与那国町。過疎地域市町村は, 北部と周辺離島に限られていることが分かる。
- (6) 奥郷友会については, 金城力人氏のお手をわずらわして同氏宅で金城篤会長, 伊礼洋次(第43代会長), 森山正巳, 翁長林頭, 宮城進, 金城成子の諸氏からの聞き取りおよび『奥郷友会会誌』等によってまとめた。
- (7) 1962年には増資5カ年計画を立て, 20歳から60歳までの男性勤労者から\$1, 女世帯と20歳以上の未婚女性から\$50の基本金を徴収し, 約\$4,000の資金を造成した。なお, 当時の通貨であるB円(ピーエン)のレートは, 日本円3円=1B円(\$1=120B円)だった。1958年にはアメリカドルへの通貨切り替えが行われ, B円は廃止された。
- (8) 金城成子氏の発言。金城氏は東村字川田出身であるが, 奥郷友会について, 客観的な立場から発言していただいた。
- (9) まるま会については, 古見用全会長, 同会青年部の那良伊功氏, 宮良敦氏, 祖納公民館総務の石垣金星氏からの聞き取り調査によってまとめた。
- (10) 石垣在西表郷友会には, 西部地区の白浜, 舟浮も含まれ, 在沖西表郷友会ではさらに廃村の網取, 崎山が含まれる。
- (11) 石垣在西表郷友会の事業としては, 成人式, 敬老会, 運動会, 三高校卒業生激励会があり, 運動会には約300人もの参加があるという。